

No.	彼 方 へ	演奏者数	演奏時間
-----	-------	------	------

舞台配置図

客 席

表示記号一覧	一 箏	= 17絃	+ 三絃	0 尺八	≠ 他楽器	* マイク	□ モニター	□ 毛氈	W 屏風
立 奏	立奏台	大 台	小 台	椅子	大 台	小 台	譜面台	台	ハイター 枚
座 奏	琴台	台	見台	台	山台	録音 有：無	録画 有：無	他	
始	緞帳：暗転	板付	毛氈 緋：紺	音響					
終	緞帳：暗転	板付	屏風 金：銀	照明					

調絃表	ピッチ A=44		編成：箏										
Part	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	斗	為	巾
箏	C	G	A#	C	D	D#	G	A#	C°	D	D#	G	C
	平調子より四九一音↑ 三八半音↑ 巾は九の甲 一は四の乙 五=D												

編成欄には面数を記入 開始調絃は太字 転調は上下の欄 ハーモニックスは右肩に○

作曲年 1991年 委嘱者 倉内里仁 構成 箏独奏 時間 10分 出版楽譜 無し

解説 この曲では、箏の演奏としては避けたほうが賢明であろう、いや、まづ避けるべき技法が曲の始まりから連続して現れる。箏という楽器の構造からいって、複数の同じ弦をかなりのスピードで左右交互に弾くことは、右手で弾いた音を左手が、左手が弾いた音を右手が、お互いに潰し合う結果、濁った音のかたまりになりやすい。しかし演奏上のテクニックが巧く行きさえすれば、ひょっとして、そこからスタッカート効果をともなった新しい箏の音を引き出す可能性があるかもしれない。と、迷いに迷った末、第一回目のリサイタルから今日迄、の十五年間に培われた倉内さんの音楽が演奏の上で、その壁を超えることを期待して、敢えて冒険にのりだしてみた。曲全体は三つの部分から成り、最初の部分は先に述べたスタッカート効果を狙った速いパッツセージが全体を支配していく。そして次の部分に移ると比較的自由なテンポでゆったりとオブリガード風な流れを創っていくが、最後の部分で再び速いテンポを取りもどり、箏特有の“押し手”の技法をふんだんに使った華やか音の動きを展開して終わる。この冒険の彼方の音楽はどんな色を私に見せてくれるだろう、楽しみでもあり不安でもある。

1991年作曲。 [作曲者] 収録媒体 ー